

神は我々の高次の能動性を讃え、受動的な謙虚や強いられた信心を退けられる

April 19, 2025

Greatchain

なぜ神と私が合同で創った宗教が、世界を支配することになったのか？ なぜ初めて、この世に、万人を満足させる宗教が生まれ、真の平和が生まれつつあり、そして私が勝利したと言われるのか？

我々は長いこと騙されていた。そしてここ一二年で初めて目を開かれた。

上に掲げたタイトルは、「神」を「ニーチェ」に置き換えれば——前稿で言ったように——完全にニーチェの主張した、神を持たない強い宗教になる。すなわち「運命愛」とも言われる、神を持たない者の「能動的受苦」宣言である。我々は初めて、ニーチェと同じ強い宗教を見出した。ただし、それは彼の戦闘的無神論によるものとは正反対の、神の愛と光によって、この世から闇と欺瞞を敗退させるものであった。

我々は歴史的にずっと間違った宗教を教えられてきた。その典型的なものは、「玉虫厨子」の扉に描かれていたという「捨身飼虎の図」であろう。人間が人間の犠牲になるというならまだわかる。しかし人間が虎の餌になって虎を救うというのは、いかにもひどい。これは自己犠牲を言おうとして、下手な比喩を使ったものと考えることにしよう。

しかし実は、この「自己犠牲」というものを、軽々しく「尊い」ものと考えてよいか疑問である。特攻隊などの例を出すまでもなく、そこには言葉の詐術がないか考えてみなければならない。これは「海行かば」の歌の「大君の辺にこそ死なめ顧みはせじ」の文句になると、いよいよひどい話になる。天皇が土左衛門や腐乱死体を見て、喜ばれるだろうか？ これは現在でも異論のある問題だろう——たえ天皇が神であったとしても。

これは「神」をどう考えるかという神概念の問題である。これを私はこのブログで何度か論じた。その都合のよい例は、マルクスが若い頃の「絶望者の祈り」という詩で言っている「私はあの天上に君臨する者〔すなわち神〕に向って復讐したい」と言っている所である。神のこの解釈は今でも、大多数の（ほとんど無意識の）無神論者によって信じられて

いる。もし神が「天上に君臨し」下界の人間どもとは別世界の存在であるなら、この私もマルクスと一緒に革命を起こすであろう。

しかし、神とはそういうものでないことを（少なくとも私は）ここわずかの年月の間に学んだ。神とは、遙かな高みから人間を見下ろすようなものでなく、愛をもって我々を包み込むような存在である。「分け御靈」という言葉が示すように、神と我々とは本来、一体であり、我々同志も一つのものであり、個性を持ちながらも、すべてが神と同じ自由意志を与えられ、より高い世界へ向かって進化している。このように考えるなら、世界に争いもなく、すべてが平和で調和している。

最近、人々は、かつて我々の使わなかった「自己愛」という言葉を、正当なものとして使うようになった。我々は自分を愛さなければ、他人を愛することはできない。かりに我々がエゴに動かされているように見えて、その動機がより高い世界を目指すものなら、誰にも処罰されることはない。ユーチューブを見ると、私に対して、「それは宗教のルールに反する」と言っているらしい人々がいる。これは古い世界に住む人々か、あるいは私を陥れようとする人々であろう。

今、このような新しい「神概念」を持つ人々と、それを間違いだとして私を敵視し、マルクスのように神に復讐しようとする者たちとが、二つに分れて争っている。

長年にわたって、我々を縛ってきた自己犠牲というものが、人間として最高の行為であるかのような教えから、我々は目覚めるようになった。これは仏教でもキリスト教でも、どこでも同じであろう。そして、ごく最近の人々の考えのように、この宇宙が「波動」というものによって繋がったものであるとしたら、一人の喜びが宇宙全体の喜びであるように、一人の苦しみや苦痛が宇宙全体に伝わるだろう。この波動には、「低い波動」と「高い波動」があり、我々は高質の喜びを高めるような行動をし、思想を持たねばならないことになる。

人を苦しめて得られる喜びが、存在するとしても、それは最も低い波動をもつから、こちらから手を出さずとも、自然に滅びていくであろう。今、我々はそういう時代に生きている。すなわち地上の人間は、自然に二つに分かれ、栄える者と滅びる者の両極に分裂すると言われている。

私は文字通り、その高い波動を求めて、厳しい規律を自らに課する詩を書いている。これは私の自由な創造であり、人々の評価や常識にとらわれるものではない。

The Foreign Sword

(From Tu Fu's 蛮劍)

What furnace wild of uncouth land in throes
Of fiery birth could bring forth this cold steel?
It is undecked with stones and free from shows
Of finery, yet nightly do I feel
A presence as of someone there and wake
To see its point give forth an eerie light.
What spirit dwells within will some day break,
A tiger or a dragon, and ride the night.
I'll seek far to present it to a sage
To lay the evil storms that still do rage.

外国の剣

(杜甫の「蛮劍」より)

いかなる知られざる未開の地の溶鉱炉が／火の誕生の苦しみの中で、この冷たい剣を生み出したのか？／それは装飾もなく、華麗な石も施されていないが／夜な夜な私は感ずる——誰かがそこにいることを。そして起きてみると／その切先が怪しい光を放っているのだ／何か知らぬそこに住みつく靈がいつの日か／そこを飛び立ち——それは虎か龍か——夜空をあまがけるだろう／私は遠く人を訪ね、賢者を見つけてこれを贈り／いつまでも吹き荒れる惡なる暴風を、鎮めてもらおうと思う。